

〈第10回〉循環器領域



北村 順先生
医療法人財団神戸海星病院内科部長
島根大学医学部臨床教授[司会]

濱名 則子先生
医療法人財団神戸海星病院薬剤部課長

梶田 祐三子先生
北里大学大学院感染制御科学府
和漢薬利用科学研究室
(発言順)

「明日から使える漢方実践服薬指導シリーズ/疾患・領域別編」の今回のテーマは、循環器領域における漢方治療です。本領域における漢方薬のアプローチの仕方やエキス剤を組み合わせた使い方などについて北村先生、濱名先生、梶田先生にお話し合いいただきました。

循環器領域で漢方薬を活用する

北村 本日は「明日から使える漢方実践服薬指導シリーズ/疾患・領域別」の第10回として循環器領域をテーマに、神戸海星病院薬剤部の濱名先生と北里大学和漢薬利用科学研究所の梶田先生とともに話し合いを進めていきたいと思えます。

私は神戸海星病院で循環器内科と漢方内科の双方で診療を行っています。本来は循環器内科、特に不整脈を専門にしてきました。西洋医学で不整脈治療を行っていましたが、どうしてもエビデンスだけでは対応できない、患者さんに満足していただけない状況が多々

ありました。自分自身、幼小の頃から漢方薬を飲む機会が多く漢方薬に対して親しみを感じていたことから、ぜひ自分の診療に漢方を取り入れたいと考えて本格的に漢方の勉強を始めました。父親が漢方指導医ということもあり、2004年から実家のクリニックに帰り4年間ほど漢方の勉強をしました。その後母校である島根大学医学部附属病院に戻り2010年に神戸海星病院に赴任しました。

濱名 私は大学卒業後研究職等を経て、神戸大学医学部附属病院薬剤部で主に消化器内科と糖尿病代謝内科の病棟を担当しました。がんや糖尿病が治療のメインでしたが、高血圧や浮腫など循環器系の疾患を併せ持つ患者さんも多くいらっ

しゃいました。そのあと勤務した病院ではグループホームの訪問薬剤指導を立ち上げました。現職の神戸海星病院でも引き続き、消化器、乳腺、糖尿病などを中心に、主にがん領域の患者さんを担当しています。循環器疾患メインの治療に関しては勉強不足のところもあり、本日は勉強させていただくのを楽しみにしています。

これまで何度か医師の方々と話し合う中で、医師は専門医として治療に集中したいため周囲の管理を薬剤師に任せたいという要望をよく聞きます。たとえば医師ががん治療に集中できるように、その副作用あるいは糖尿病や高血圧などの合併症のフォローを薬剤師に担って欲しいなどです。

特にがん領域では治療を助けるために補剤としてや副作用対策に漢方薬がよく併用されており、また糖尿病性神経障害などの症状緩和にも漢方薬を使うことがよくあります。漢方薬についての服薬指導も増えていると思います。

北村 濱名先生には私が神戸海星病院に赴任したときから漢方薬の導入などでお世話になっていますが、漢方薬の使い方などについて深く意見交換することはなかったもので、今日は楽しみにしています。

梶田 私は大学4年生のときに1年間、天然物化学研究室に所属し、指導教授が植物からの化合物の抽出と構造決定を専門にしていたことから植物をテーマに研究しました。卒業後は神戸海星病院薬剤部に就職しました。

抗菌薬の使い方に関心がありましたが、一方で漢方薬にも興味を

持ち、入職3年目の終わりに漢方薬・生薬認定薬剤師にチャレンジして認定を取得することができました。そのときに北里大学の花輪壽彦先生と今の所属研究室の前任教授である山田陽城先生の講義を聞いて、感染症と漢方薬という自分が興味を持っている2つを組み合わせた研究を行っている研究室があることを知り、北里大学大学院に進学しました。現在は清原寛章先生の指導の下で補中益気湯の感染制御作用を中心に研究しています。

北村 補中益気湯による感染制御は本日のテーマとは離れますが、私も非常に関心を持っており日常臨床でも効果を実感しています。**梶田**先生とも、在職中は漢方薬についてお話しすることはあまりありませんでしたが、本日の鼎談は読者の方に新しい学びが提供でき

る場になればと思います。

利水と駆瘀血に焦点を絞る

北村 現代の循環器診療は基本的にエビデンスに基づいて作成されたガイドラインに沿って行われます。ガイドラインでは細かい部分まで、ケースに応じた対応が決められており、医師の個人的な考えや経験的な治療を持ち込むことはほとんどできません。ですから循環器専門医は、ガイドラインに記載されていない漢方薬には手を出さないことが多く、私のように循環器と漢方の専門医は少し珍しい存在といえます。

具体的な話に入る前に漢方診療における私の考え方を説明しておきたいと思えます。漢方医学には中医学と日本漢方という2つの柱がありますが、私は日本漢方をベ-

鼎談のポイント

●循環器疾患治療における漢方薬の役割

- ・ガイドラインが基本の循環器疾患治療において漢方治療は一般的ではない。ただし、西洋薬で対応できない症状や病態に漢方薬は有用である。
- ・当帰芍薬散は虚血性心疾患に対し効果が期待される処方である。
- ・対処の難しい訴え・病態(例：胸痛など)に対して漢方薬を処方することは患者の安心感につながる。
- ・西洋薬の不得手とする症状、西洋薬の副作用対策に漢方薬を使用することで患者満足度を高めることができる。
- ・エキス剤を組み合わせることで、漢方薬の処方ごとの特徴を活かした使い方ができる(例：こむら返りに芍薬甘草湯+当帰芍薬散で甘草の量を抑制)。

●循環器疾患に使用される漢方処方(表1~7)

●服薬指導

- ・飲み方よりも確実に服用することを目標に服薬指導をする。

- ・小児や認知症の人に対して飲ませ方を工夫してサポートする。
- ・飲み忘れたときには、その分を寝る前に飲んで1日量を守る。
- ・漢方薬にも副作用があることを伝える。
- ・遺伝子異常のある人は甘草の量が少量でも浮腫がみられる点に注意。また、複数の医院を受診している人がいることもある。甘草を含む漢方薬、利尿薬を服用する患者に対して併用薬の有無を確認する。
- ・循環器領域では特に麻黄、甘草、附子を含む漢方薬に注意が必要。

●その他

- ・漢方薬は専門医のみが処方しているわけではないため、適正に使用されるために医師は薬剤師に処方チェックなどの役割を期待している。